

法成寺の西北院・東北院について

松井 忍

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

法成寺の西北院・東北院について

松井 忍

1. はじめに

法成寺は、藤原道長の威信をかけて寛仁四(1020)年に創建された寺院である。しかし、度重なる鴨川の氾濫や秀吉による寺町造成などの影響により、現在は発掘調査でもその全容を知ることは困難である。

これまで、緊急工事に先立つ立会調査や発掘調査などによって確認された法成寺の遺構はほとんどと言ってもいいほど存在せず、わずかに法成寺の専用瓦とされる緑釉瓦などの分布によって寺院の存在が想定できるだけであった。

しかしながら、近年の調査において、法成寺の境内にあったとされる西北院の遺構の一部とみられる井戸のほか、平安時代の遺構や遺物と考えられるものが確認され、わずかながらも法成寺の一端が垣間見えつつある。西北院は、出家した道長の室倫子のために、東北院は、同じく出家した道長の娘彰子のために法成寺境内に造営された施設である。いずれも、洪水や火災などにより被災するたびに法成寺の他の堂宇とともに再興され、文献などにはその名を見ることができが、詳細については分からないことが多い。

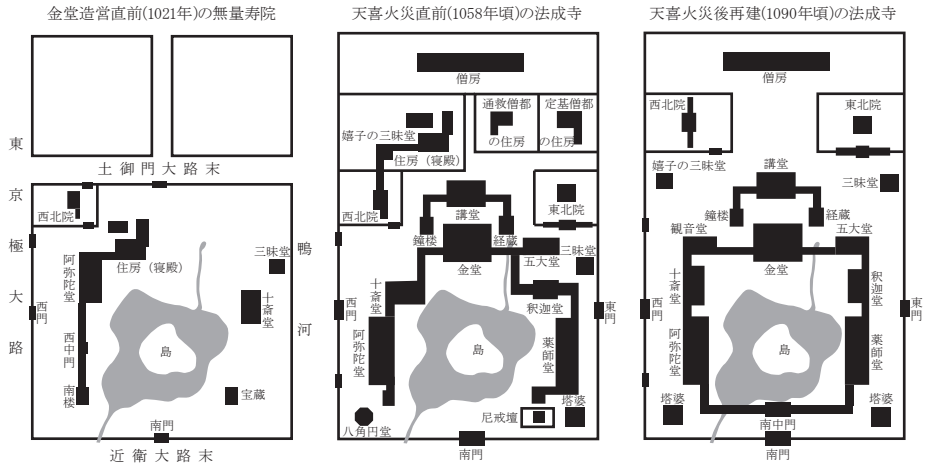
そこで本論では、法成寺境内に造営された西北院と東北院について文献史料及び考古学的成果から再考してみたい。

2. 法成寺における伽藍配置

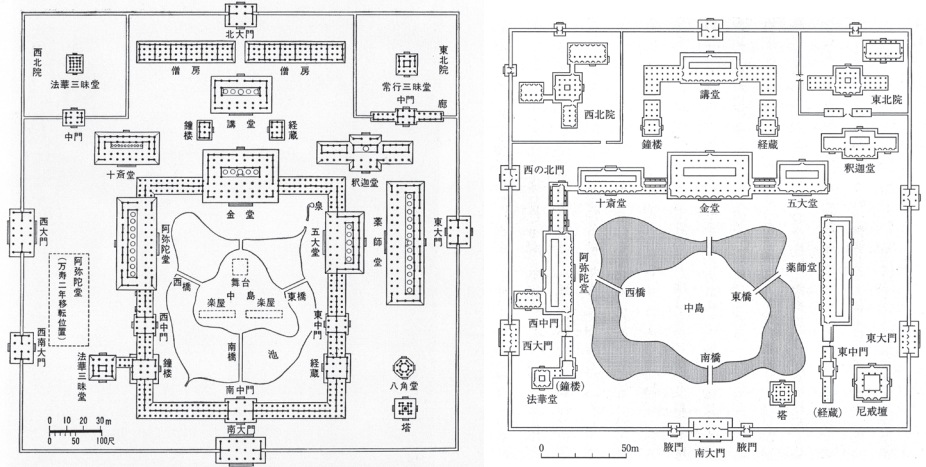
西北院と東北院の位置を考える上で必要となる法成寺の伽藍配置図については、これまで福山敏男^(注1)や杉山信三^(注2)、清水擴^(注3)などによって提示されてきた(図1)。

そもそも法成寺は、晩年に様々な病に苦しめられた道長が、出家した自身の住まいを確保し、病の安穩と自身の往生を願って無量寿院(阿弥陀堂)を建立することが当初の目的であり、その後は次々と周辺に建物を建て、変更を加えながら伽藍を整えていったと考えられる。

そのため、杉山氏が提示された伽藍図のように、火災などによる堂宇の再建や移動による変遷があったことは、文献史料などから読み取ることができる。また、清水氏は浄土教



杉山信三氏復元案 (注2文献をトレース・追記)



福山敏男氏復元案

清水擴氏復元案

図1 法成寺の各復元案

建築史上の立場から、様々な文献を用いつつ境内における建物の配置や規模等の復元を丁寧に取り扱われており、現実味を帯びた復元図として評価できよう。

今回は、その詳細の位置関係については触れず、西北院・東北院の位置関係についてのみ考えることとし、復元図については主に清水氏のものを使用しながら考えていきたい。

一般的に、寺院の中で最も重要となる中心的建造物は金堂であるのが通例である。ところが、法成寺が造営された当初の目的は道長自身の病氣平癒と、僧となった道長自身の居住場所の確保であることは先に述べたとおりである。そのため、最初に道長自身の住所となる建物と阿弥陀堂を造営し、その後に金堂や薬師堂などの堂宇を次々と建立していくこ

表1 法成寺関連年表

寛仁三 (1019) 年 三月	道長が出家
寛仁四 (1020) 年 三月	九体阿弥陀堂を造営し、無量寿院とする
同年 閏十二月	十齋堂供養 (三昧堂も同時か)
治安元 (1021) 年 二月	室倫子が出家
同年 十二月	西北院供養
治安二 (1022) 年 七月	金堂・五大堂供養
治安四 (1024) 年 六月	薬師堂供養 (五大堂も移転か)
万寿三 (1026) 年 三月	新阿弥陀堂供養 (旧堂取り壊し)、尼戒壇供養
同年 七月	娘彰子 (上東門院) が出家
万寿四 (1027) 年 五月	新十齋堂供養
同年 八月	釈迦堂供養 (塔もこの頃完成か)
同年 十二月	阿弥陀堂にて道長薨去 (62 歳)
長元三 (1030) 年 八月	東北院創建
永承五 (1050) 年 三月	頼道により新堂 (講堂) 創建
天喜元 (1053) 年 六月	倫子薨去 (90 歳)
天喜六 (1058) 年 二月	火災により全焼
康平二 (1059) 年 十月	阿弥陀堂・五大堂再建供養
康平四 (1061) 年 七月	東北院再建供養
治暦元 (1065) 年 十月	金堂再建、薬師堂・観音堂供養
延久四 (1072) 年 八月	西北院再建供養
延久六 (1074) 年 二月	頼道薨去 (83 歳)
承保元 (1074) 年 十月	阿弥陀堂にて上東門院薨去 (87 歳)
承暦三 (1079) 年 十月	東西二塔・釈迦堂・十齋堂・法華堂供養
永長二 (1097) 年 十月	新堂 (講堂) 供養

とになる(表1)。今回の考察対象としている堂宇の一つである西北院は、出家した道長の室倫子のために治安元(1021)年十二月に造営された施設である。寺院境内の「西北」部に造られたとされており、文献史料によると、三間四面の檜皮葺の御堂で周囲に築地を巡ら^(注4)せ、東面して^(注5)おり、北面には門が設置されて^(注6)いた^(注7)という。

一方、東北院については、道長の娘彰子(上東門院：万寿三年七月出家)のために長元三(1030)年八月に建立されたもので、『諸寺供養記』をひく『小右記』によると、「法成寺内長角新立三昧堂」とあり、常行堂で「分居東御在所舎南庇并東西廊屋」とあることから、東西廊が付属していたとみられる。また、『諸寺供養類記』に「大鼓立中門東西廊前」とあり、南門の東西にも廊が付属していたとみられる。西にも門を開き、^(注8)西北院と同様に周囲には築地を巡らせて^(注9)いたとみられる。

3. 移転後の西北院・東北院の位置

法成寺は、天喜六(1058)年二月の火災によって全焼し、西北院・東北院もその際に焼失したとみられているが、翌年に再建された阿弥陀堂・五大堂に続き、火災から3年後の康平四(1061)年には東北院が再建され、西北院は少し遅れて延久四(1072)年に再建された

とされている。

『定家朝臣記』康平四年七月二十一日条には、「東北院を供養せらる。本是れ、法成寺の東北に建立す。故に此の号有り。而るに去ぬる康平元年、灰燼と為る。仏像、纔かに烟炎を免る。仍りて此の地を占め、旧のごとく堂舎を建立し、本仏を安置するなり<件の地、故定基僧都並びに通救僧都等の房。皆、仏閣と為して伝へ預く。今、便宜に依りて他所に相転ぜらる。彼の堂舎を他所に運び移すなり。>」とある。天喜六(康平元・1058)年に法成寺と共にほぼ全焼した東北院は、元あったように建物が再建されたが、その場所は定基僧都・通救僧都らの僧房があった場所だという。この僧都らの僧房場所がどこであったのかが問題となってくるのだが、それを明記するような文献は見当たらない。しかし、その移転先を知る手がかりとなるのが『拾芥抄』(中巻 諸名所部第二十)である。そこには、平安京周辺に配置された寺院や貴族の離宮などとともに、「西北院 一條南京極西」「東北院 一條南京極東 上東門院御所云々」と記される。つまり、法成寺の境内にあった西北院と東北院は、少なくとも南北朝時代には当初の位置から離れた場所(図4)に移転していたと考えられるのである。

移転の契機は、やはり先述したとおり、天喜六年の火災であろう。

一方、西北院・東北院が移されたとされる「故定基僧都並びに通救僧都等の房」があった場所について考える際、一般的に僧房は寺院伽藍の北側区域で、講堂よりもさらに北に位置するものというのが通例のため、法成寺境内でも北側にあったと考えるべきである。つまり、図1に示した杉山氏の復元案のように元々の境内とされる方4町の北側に2町分広げた敷地内に僧房が建てられていたと考えると自然ではある。しかしながら、「故定基僧都並びに通救僧都等の房」についてはその例に従わず、境内から外れた位置にあったと考えられているのである。

『拾芥抄』の原型が成立したとされる鎌倉時代中期の正応元(1288)年に記された『実躬卿記』三月記に「西北院御念佛」とあることから、『拾芥抄』に記される西北院、さらに同様に存続していたと考えられる東北院の位置については、移転先である西北院と東北院の位置をそのまま反映していると言えるであろう。先述したとおり、北側に2町分拡張された一角ではなく少し離れた位置に移転したために、敢えて「移し立てたもの」と記録されたと考えられる。

西北院はその後衰退し、現在は名称すら残らない寺院であるが、東北院については、さらに場所を移して現在も存在する。寺伝によると、承安元(1171)年七月十一日の火災で護摩堂・不断経所などを除いて全焼、応仁の乱で再び焼失し、以後は荒廃したとされている。元禄五(1692)年十二月一日の火災で再度焼失し、翌年に上東門彰子の子である後一条天皇

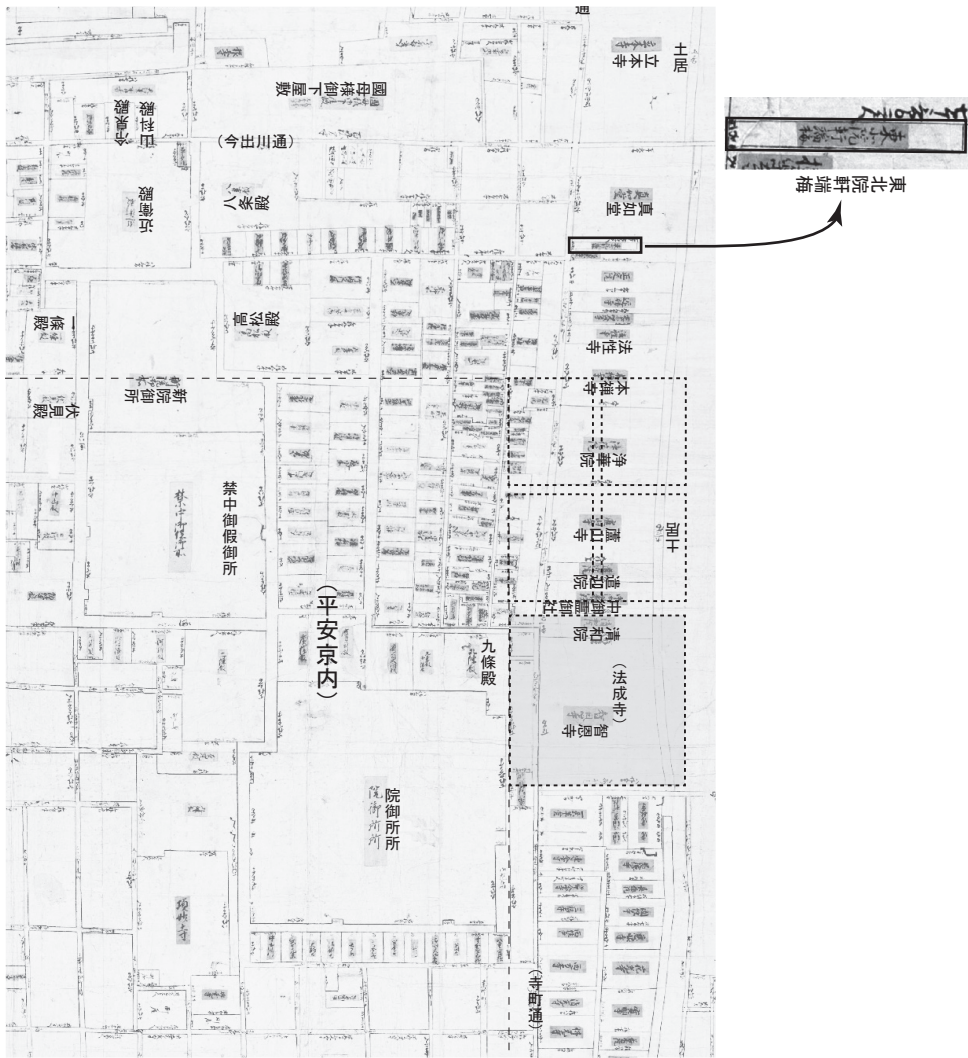


図2 「寛永後萬治前洛中絵図(京都大学附属図書館所蔵に加筆)」における法成寺跡の推定位置の菩提樹院陵の正面に位置する現在地(京都市左京区浄土寺真如町83)に移されたとされている。

江戸時代に描かれた絵図に法成寺跡の推定位置とその北側4町分をそれぞれ加筆したのが図2・3である。火災前の1642年頃に描かれたとされる「寛永後萬治前洛中絵図」では、『拾芥抄』で「一條南 京極東」とされる移転後の東北院の場所よりもやや北東側の位置に「東北院軒端梅」という名称を見ることができる。「東北院軒端梅」というのは、彰子に女房として仕え、院内に住んだとされる和泉式部が植えたと言われる梅の木と伝わるもので、謡曲「東北」の演目としても有名である。このように、移転後の東北院については、その

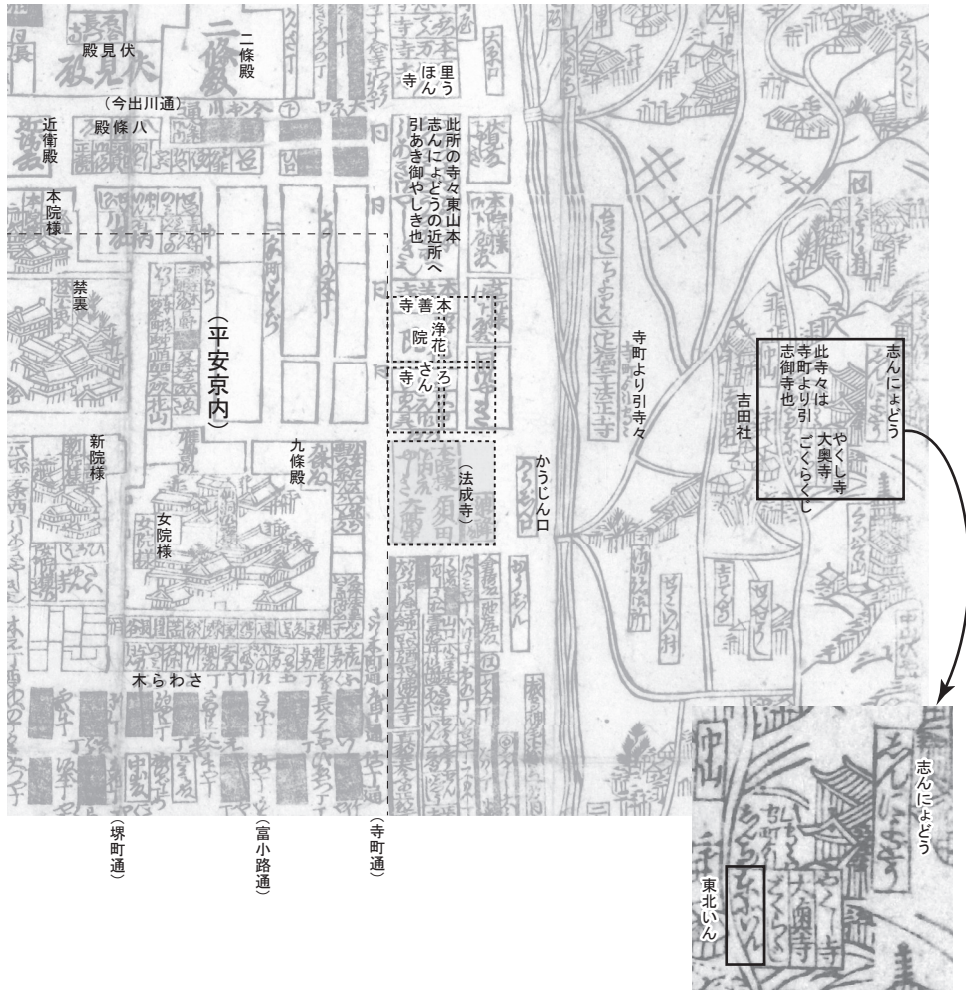


図3 「新板平安城并洛外之図 京之図(大塚隆編1994に加筆)」^(註11)における法成寺跡の推定位置

後移転される前までは西北院の東側の地にあったことは間違いなく、火災があった元禄五(1692)年以後に描かれた「新板平安城并洛外之図 京之図」(1696年)では、周辺の寺々とともにさらに東へと移転した現在の地に「東北いん」と書かれている(図3)。

4. 発掘調査成果からみた西北院

ところで、発掘調査において法成寺の存在を示す遺物の象徴とされるものの一つが、緑釉瓦である。福山敏男氏が『法成寺の古瓦』^(註12)において紹介された瓦は、現在の府立鴨沂高等学校の敷地内で昭和9年にみつかったものとされている。いずれも緑釉瓦を含む平安時代の瓦で、丹波篠窯及び山城幡枝瓦窯で焼成されたものであるという。

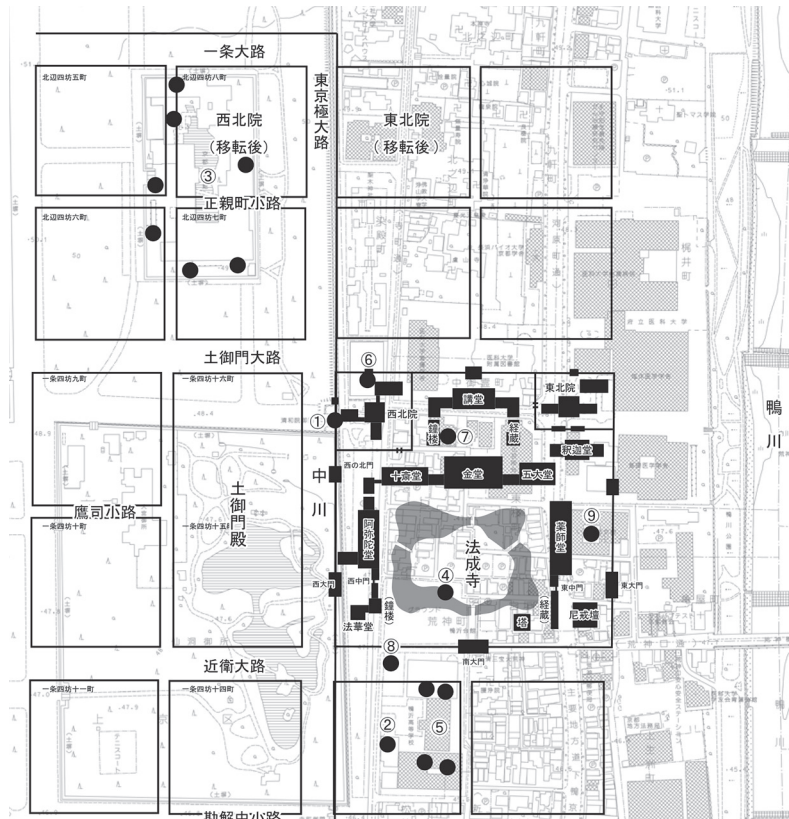


図4 法成寺の発掘調査及び関係遺物出土場所(○番号は表2に対応)

表2 法成寺の発掘調査一覧

	調査年	調査場所	調査契機	調査機関	調査成果・概要	可能性のある施設
①	明治44(1911)年	京都御苑清和院御門前	水道管敷設工事	-	緑釉瓦採集	(西北院西門)
②	昭和9(1934)年	旧京都第一高等女学校(現:鴨沂高等学校)	運動場造成工事	(京都府)	法成寺関連の軒瓦22点(軒丸瓦8点、軒平瓦14点)、緑釉瓦を採集	(南大門・築地)
③	平成10~14(1998~2001)年	京都迎賓館(京都御苑内)	京都迎賓館建設	京都市埋蔵文化財研究所	平安~鎌倉時代の遺構及び平安中期の緑釉瓦84点	移転後西北院か
④	平成26(2014)年	鴨沂高等学校(北校地)	防球ネット建設工事(立会調査)	京都府教育委員会	緑釉瓦4点出土(氾濫堆積層)	(池周辺)
⑤	平成26(2014)年	鴨沂高等学校	校舎改築工事	京都府埋蔵文化財調査研究センター	緑釉瓦多数点出土(近現代盛土)	(法成寺推定地の南城)
⑥	平成26(2014)年	梨木神社境内	マンション建設	古代文化調査会	井戸跡・北限溝検出、緑釉瓦167点出土	西北院
⑦	平成27(2015)年	東桜町	マンション建設	古代文化調査会	緑釉瓦多数点出土(氾濫堆積層)	(講堂)
⑧	平成30(2018)年	鴨沂高等学校	試掘調査	京都府教育委員会	緑釉瓦多数点出土(氾濫堆積層)	(南大門・築地)
⑨	令和3(2021)年	東桜町	(工事現場)	-	巨大礎石(出土位置等は不明)	(薬師堂)

『栄花物語』によると、法成寺の中で瓦葺建物とされているのは、阿弥陀堂・金堂・薬師堂・講堂で、檜皮葺とされているのは、釈迦堂・法華三昧堂・西北院である。中でも、金堂には緑釉瓦が葺かれていたとされており、『栄花物語』巻十七には、「この御堂を御覧ずれば、七寶所成の宮殿なり。寶楼、真珠の瓦あをく葺き、瑠璃の壁白くぬり、瓦光りて空のかけ見え・・・」とある。これまでの発掘調査では、法成寺の瓦として緑釉瓦に焦点が当てられてきたが、実際に緑釉瓦が葺かれていたとされるのは、創建時の金堂のみであったとみられ、他の瓦葺建物には緑釉瓦ではない法成寺所用瓦が葺かれていたと考えられる。

一方、これまでの法成寺に関する遺構・遺物が確認されている発掘調査事例をまとめたのが、図4及び表2である。その遺物のほとんどは、明らかな遺構に伴うものではなく、氾濫堆積層からの出土であるが、注目すべきは③と⑥である。③は、京都迎賓館における調査で、移転後の西北院とされる位置に相当する。^(注13) また、⑥は梨木神社境内の調査で、創建時西北院の位置に相当する。^(注14) いずれも、多くの緑釉瓦が出土していることが注目される。先述したように、創建時の西北院は檜皮葺であったとされているが、再建された移転後の西北院に瓦を葺いていたのかどうかについては、文献史料からうかがい知ることはできない。それゆえ③の緑釉瓦については、創建時に金堂で使用されていた瓦を西北院再建時に

再利用して葺いていたと考えられよう。

⑥は、平成26年に梨木神社境内で行われた調査である。法成寺に関する主要遺構として、北限を示すとみられる東西溝2条と西北院内に掘られた井戸2基が確認されている(図5)。東西溝は、西北院の築地外溝(土御門大路京外南側溝)で、法成寺の北限溝とされるが、北側の溝212には、多量の平安時代の瓦(二次焼成を受けた緑釉瓦などを含む)とともに室町時代の瓦器類なども出土することから、時代と共に土御門大路京外道路が狭小化

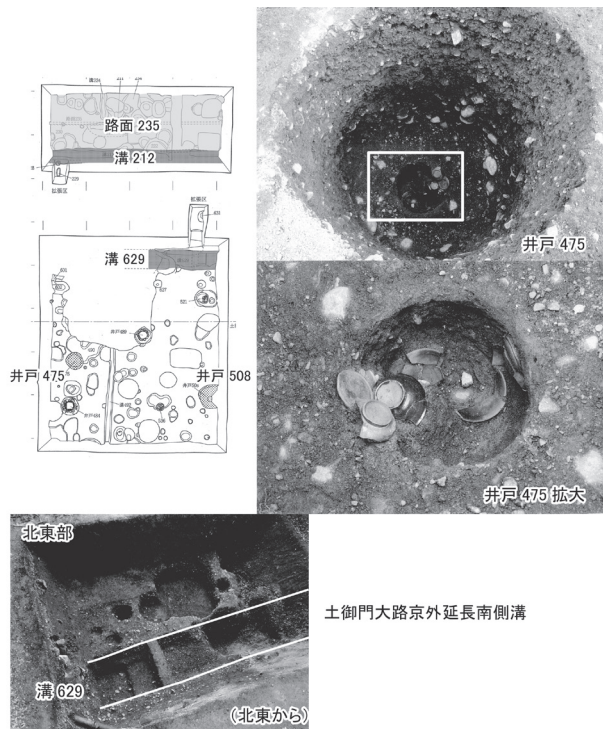


図5 梨木神社境内発掘調査地点(⑥地点・注14文献から)

していったものと考えられている。また、井戸からはいずれも11世紀前半から中頃までの土器群が出土している。中でも緑釉陶器には火災などによる二次焼成を受けているものがあり、法成寺西北院が全焼したことにより、井戸等へ不要となった土器や瓦を廃棄した様子がうかがえるとともに、法成寺再建の際に寺域を一部拡大していた可能性があったことは興味深い。考古学的観点から見ると、元あった境内の北側を一部拡張した可能性が考えられるであろう。

5. 法成寺と東北院・西北院最後の姿

では、法成寺、そして再建された東北院・西北院はいつまで存在していたのであろうか。文献史料では、西北院は『実躬卿記』弘安十(1287)年五月十三日に「西北院御念佛」と見えるのが最後となる。東北院については、元禄五(1692)年の火災で焼失した翌年に現在の地に移転したことが絵図等により明らかになっている。

一方、法成寺については、『徒然草』第二十五段に「京極殿・法成寺など見るこそ、志留まり、事変じにけるさまはあはれなれ。(中略)大門・金堂など近くまでありしかど、^{しょうわ ころ}正和の比、南門は焼けぬ。金堂は、その後、倒れ伏したるまゝにて、とり立つるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、その形とて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、なほ鮮かに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、未だ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから、あやしき^{いしづえ}礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。」とある。正和の頃(1312～1317年)に南門が焼けて金堂も倒れ、無量寿院(阿弥陀堂)だけが残るとされる。

また、南北朝争乱の際に「同冊日合戦、於法成寺西門前、朝行郎等楯本余一吉弘、組落太田判官家人関孫五郎而、則取頸畢、」(『熊谷家文書』建武三(1336)年正月)とあり、敵を追い詰めて首を取った場所として「法成寺西門前」とみえることから、少なくとも鎌倉末期頃までは法成寺の一部が残っていたと考えられる。

6. まとめ

このように、道長が威信をかけて創建した法成寺は、度重なる鴨川の氾濫や火災等によって廃絶し、現在はその姿を見ることができない。しかし、近年の発掘調査によって法成寺境内に造営された「西北院」の関連遺構・遺物が確認されるなど、少しずつではあるが法成寺の姿が明らかにされつつある。

また、法成寺境内に造営された西北院と東北院は、天喜六(1058)年の火災を契機に境内から少し離れた他所へと移転したとされている。西北院については現存しないものの、そ

のうち東北院の場所については、江戸時代の絵図から概ね辿ることができた。そして、一時は衰退したものの、その後さらに東へと移転し、現在は道長・彰子・和泉式部ゆかりの古刹として名を馳せている。

今回、法成寺の西北院・東北院について考察するきっかけとなったのは、京都府立図書館での講演会「道長と法成寺—みやびとうつわ—」である。この機会を与えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

(まつい・しのぶ=当調査研究センター調査課調査員)

- 注1 福山敏男1964「藤原撰関家の寺」『日本の美術9 平等院と中尊寺』平凡社
- 注2 杉山信三1968『奈良国立文化財研究所学報 第十九冊 藤原氏の氏寺とその院家』奈良国立文化財研究所
- 注3 清水擴 1992『平安時代仏教建築史の研究 -浄土教建築を中心に』中央公論美術出版
- 注4 月比御堂の戌亥の方に隔て、上の御堂たてさせ給へり。皆築地をしこめて、三間四面の檜皮葺の御堂、いとさゝやかに、をかしげに造らせ給ひて、北南西の方と廊渡殿造り續けさせ給ひて、十二月十餘日の程に御堂供養あり。(『栄花物語』卷十六 本のしづく)
- 注5 禅閣同着堂<佛前北、卿相南、件堂東面>(『小右記』治安元年十二月三日条)
- 注6 法成寺西北院の北門の外に参る(『左経記』万寿二年八月二十九日条)
- 注7 特に文献類に記載はないが、伽藍配置図にはいずれも西北院南側に門を設定している。
- 注8 「巳剋上卿列立、御輩出左衛門陣、午時御東北院□西門控御輩、」(『水左記』康平七年十月十三日条)
- 注9 まことや女院は、無量寿院の傍に御堂たてさせ給へり。築地□きわたしこめて、いみじくめでたく造らせ給へり。(『栄花物語』卷三十二 歌合)
- 注10 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ(<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000143>)
- 注11 大塚隆編1994『慶長 昭和 京都地図集成 -1611(慶長16)年~1940(昭和15)年-』柏書房 p.45
- 注12 福山敏男1983「法成寺の古瓦」『寺院建築の研究』下 中央公論美術出版
- 注13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊 -第1分冊(公家町形成前)-』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊)
- 注14 古代文化調査会2023『法成寺跡・公家町遺跡—梨木神社境内—』